

## 筑波大学における聴覚障害学生支援スタッフの意識を探る

田端 毬花

大学などの高等教育機関に在籍する障害学生の数は毎年増加しており、その受け入れや修学支援体制の整備は急務となっている。そういった中で、障害学生の授業支援の担い手は教職員だけではなく、学生による支援も大きな位置を占めている。

本研究は、研究対象を筑波大学の聴覚障害学生支援にしぼり、支援を行う学生（支援スタッフ）の支援活動への参加動機や継続動機などを明らかにすることを目的とした。調査は参加動機や継続動機、参加以前の福祉への興味、謝金やタイピング技能などについての質問項目を設定し、聴覚障害学生支援に携わる学生 9 名にインタビュー調査を行った。参加動機に影響しているという予想から、参加以前の福祉への興味について項目に加えた。筑波大学の障害学生支援は謝金が支払われるため、参加動機や継続動機に影響しているという予想から謝金の項目を加えた。また、聴覚障害学生支援にはタイピング技能が必要となってくるため、タイピング技能が参加を決定する要因として影響している可能性があると考えた。これらの質問項目から得られた結果をそれぞれ照らし合わせ、どういった学生がどういった意識で参加しているのかということを探った。

結果として、参加動機には福祉への興味とタイピング技能が影響しており、タイピング技能は参加を決定づける要因として、ときには福祉への興味よりも大きく影響していることが明らかになった。また、継続動機には物質的報酬、精神的報酬、経験的報酬の概ね三種類の報酬が存在することがわかった。参加動機が「謝金」の場合には物質的報酬「謝金」、参加動機が「障害者支援への興味」の場合には経験的報酬「障害者理解」という報酬が継続動機となった。この他にもいくつか報酬が存在するが、参加動機や福祉への興味に関わらず、多くのケースにおいて精神的報酬「人との関わり」が継続動機となっている。

障害学生支援活動に対する意識について分析してみると、もともと障害者支援に興味があり、参加動機が「障害者支援への興味」という場合には「障害学生支援」として捉えている。しかし「障害学生支援」以外の捉え方も複数存在し、参加動機が「謝金」である場合には「仕事」として、「ボランティア参加への意欲」である場合には「ボランティア」として捉えている。また継続動機が「人との関わり」である場合には、「障害学生支援」や「仕事」よりも「楽しいもの」としての意識が強くなることがある。この他、継続動機に「自己承認欲求の充足」がある場合にも「仕事」として捉えている。この考え方には、お金がもらえる仕事をしていることが他者からの承認につながると考えているケースと、お金などの形で示されなければ自らの価値を認めることができないというケースが存在した。

以上のように、参加動機や継続動機によって障害学生支援に対する意識は異なっていることが明らかになり、こういった意識の違いを踏まえた支援体制作りが必要となるだろう。

(指導教員 後藤嘉宏)